

## 補陀落渡海：南方の浄土を目指して海を渡る

サンスクリット語の Potalaka を語源とする「補陀落」は、南方の海の彼方にあり、慈悲の仏である観音菩薩が住まう浄土の名前です。補陀落は中世の日本で広く信仰されていました。僧の中には補陀落は阿弥陀如来の西方浄土より容易にたどりつけると説いたものもいました。やがて、観音の信奉者が補陀落に渡ることを願って海で入水する補陀落渡海という風習が生まれました。

決して一般的ではなかったものの、補陀落渡海は日本各地の沿岸部で江戸時代（1603–1867）の中ごろまで試みられていました。補陀洛山寺は補陀落への出発の地として特に有名でした。この寺の住職たちは、868 年から 1722 年までの間に 20 回以上の補陀落渡海を果たしました。これらの渡海は全て、この寺の外にある石碑に列記されています。

### 補陀落渡海の興隆と衰勢

『熊野年代記』という歳時記の 868 年の記録には、補陀落に向けて補陀洛山寺から旅立った最初の人物として慶龍という僧の名が記されています。919 年、祐真という僧が 13 人の信者を連れて慶龍に続きました。中世後期には頻度が上がり始め、16 世紀の間だけで約 10 回の補陀落渡海が行われました。これはおそらく、大名たちの覇権争いに伴う世の中の不安の高まりと戦の頻発に関係していたのでしょう。渡海を試みた人々は、単に補陀落にたどり着こうとただけではなく、観音菩薩が後に残された長く苦しんでいる民衆を救いに来ることを願っていました。

やがて、補陀洛山寺における補陀落渡海は公式化されました。全国各地からこの寺を訪れる信者に対し、住職（着任にあたって「渡海」という名を名乗りました）は必要な事前の儀式を行い、渡海を先導する義務を負っていました。1565 年には、金光坊と呼ばれる僧が意思に反して渡海を強いられたという特に恐ろしい出来事がありました。金光坊は今でも補陀落渡海を行った人物に数えられています。死後、「上人」という敬称はつけられていません。

おそらくこのような出来事も関係して、17 世紀以降、補陀落船に乘せられるのは僧が亡くなってからとなりました。1722 年に南方の浄土に向けて遺体で送り出された最後の補陀洛山寺住職は、宥照でした。

### 補陀落渡海船

いつしか、補陀洛山寺では標準化した補陀落渡海船が使われるようになりました。この渡海船を使ったのは僧侶のみで、在家の信者は単純に普通の小舟を使いました。補陀落渡海船は 500 年前

に制作された『那智参詣曼荼羅』の右下にも描かれています。寺の外には 1993 年に造られた船の実物大模型が展示されています。

この船の設計で最も目を引く特徴は、密閉された船室です。外側から釘でふさがれた窓も扉もない船室には、わずかな食料と水、灯りの燃料が入れられ、僧侶が死の直前まで経を唱え、観音菩薩に祈りつづけられるようになっていました。

船室は、四十九本の板でつくられた鮮やかな朱塗の柵で囲まれていました。柵には四方に一基ずつ、合わせて四基の鳥居が設置されていました。これは仏教建築というよりは神道の神社を想起させるもので、熊野信仰の習合的な性質を反映しています。また、この船のつくりは修験道の葬送儀礼とも通じる部分があります。行者自身と世の中の両方に大きな功德をもたらそうとしたことにおいて、補陀落渡海は修験道の苦行と近いものと見なされていたのかもしれませんが。